せめて彼らが自らを尺度にしさえしなければ……

ヘルダーリン『ヒュペーリオン』・公開書簡、1996年10月3日

マオタイのお客様、友人の皆様

1996年末にベルリン・ミッテ地区で小さなタイ料理店を開店する見通しが立ちましたが、またしても料理人へのビザが拒否されています。

連邦職業安定庁の出先機関であるフランクフルトの「国際ホテル・飲食業交流中央局（ZIHOGA）」の主導のもと、ドイツの公務員たちは今や外国においてまで、誰が料理人であり、誰がドイツに来てよいかを決めようとし始めました。

新たな業務指示によれば、EU域外の国の料理人は今後、お客様をもてなす前にゲーテ・インスティトゥートのドイツ語証明書を取得しなければならなくなる可能性があります。さらに、彼らの選考は、現地の官僚機構の手を借り、ドイツの役人の好みに従って、繊細に行われるというのです。まったくドイツ的ではない生活環境のためにそのような教育を受けられない人々に対して、専門学校の卒業資格まで求められます。

マオタイとカマラの料理人で、フランクフルトの連邦公務員たちが考え出したこの巧妙な障害を免れる者は一人もいません。彼らは、タイの貧しい中心部である東北地方の出身です。貧困とより良い暮らしへの憧れが、その土地の子どもたちをフランクフルトの売春宿にまで駆り立てる地方です。彼らは数年間小学校に通ったあと、生計を立てるためにかまどの前に立ってきました。ドイツ式の職業教育制度がないことは言うまでもありません。それでも、ドイツの証明書がなくとも、お客様は彼らの腕前を味わって分かるのです。

ZIHOGAの役人たちは、ドイツの物差しで世界を測るべきではありません。厨房にまで入り込んで、タイ料理という芸術の蘭がどのように育つべきかを支配し、評判の高い、今なお税金を納めている事業を壊すところまで行くべきではないのです。ハーブの香るマオタイの世界は、ドイツ

ではたやすく枯れてしまいかねません。そうなれば、ドイツ国家の金庫には少なからぬ額の税金と社会保険料が入らなくなり、ベルリンの人々は多くのおいしい一口を逃すことになるでしょう。

1991 年、私は東ドイツに戻りました。東ドイツの人々が 40 年間失ってきた人生と世界を、タイ料理を通じて、お客様と私自身のために少しでも取り戻すためです。私は遅かれ早かれ、他の国に料理の亡命を求めなければならないのでしょうか。――私はコールハースにはなりません。

私のタイ料理店を存続させるため、私は 4 年前からドイツの高級官僚制という万里の長城を包囲し続けています。しかし、事業者として自分の店に責任を負うのと同じように、市民として私は自分の国家にも責任を負っています。私たちの国には、住民に寄り添う生産的な官僚制が必要です。

私の納める税金で生計を立てている人々に、私は当然のこととして助けを期待します。しかし、彼らが職務に守られた無頓着さで、紙の死の天使のように、苦労して築き上げたものを破壊しようとするなら、私は抵抗します。責任ある政治家が適時に彼らを制してくれることを願っています。万里の長城もいつかは崩れるのです。

どうか私を助けてください。下記へ手紙を書いてください。

連邦労働社会大臣

ノルベルト・ブリューム博士　53123 Bonn, Rochusstr. 1.

ノルベルト・フランケンシュタイン　1996 年 10 月 3 日

東ドイツ人、日本学者、マオタイ店主

ドイツ語の原資料の翻訳